

ケチと呼ばないで

横浜共立学園中学校 3年 ^{よねおか}米岡 ^{めい}芽生

幼い頃の私はスーパーで商品の単価を計算し、こっちの方が実はお得だよ。と母に助言してはありがたがられていた。その時は「しっかりしていて立派ね。」なんてみんなで軽くおだてていたのに、中学生になった私がお小遣い帳を眺めて数カ月先の所持金を予想したり、欲しい物をなるべく安く買えないかインターネットで調べようとすると「そんなにお金のことばかり気にしていやねえ。」などと言い眉をひそめるのはどういうことだろうか。以前と何が違うというのだ。

そもそも私がやり繰りに苦慮することになったのは、欲しい物は割と自由に買ってくれる母なのに、中学生になってから私のはまったあるバンドのグッズや本だけは、自分があまり好きではないという理由で買ってくれなかったのがきっかけだ。通常版 CD は買ってくれるのに、特典付き CD は買い渋るなんてまったく意味が分からない。

それならば。ということでお小遣い制に変えてもらい、自分でお金の使い道を決められるようにしたところ、これまで何の気なしに使ったり眺めたりしていた金額がすべて自分の月のお小遣い額を通して見えるようになってしまった。なんというか、気軽に飲んでいたタピオカ代とか、遠くに遊びに行った時改札で自動的に引かれる交通費などが今までより鮮明に現実のお金として迫ってくるようになったのだ。もらったまま机の中に入れっぱなしにしていた何枚もの図書カードは急に金券だと思えてきたし、教育学の学士を持つフィリピン人講師との1回のオンラインレッスンが200円以下だと知った時には物価の差があるとはいえ申し訳ない気持ちが出た。

こうしてお小遣いをもらえば推しのグッズが好きなだけ買えるだろうという私の目論見は大いにはずれ、結局お金のお金が身に染みてこれまで以上に使い道にシビアになってしまった訳だが、それに加えてお小遣い額という基準となるモノサシを持ったことで、自分と現実の社会とのつながりをより身近に感じるようになってきた。

例えば好きなバンドのファンクラブ年会費6000円を貯められない私に、母が月々のローン払いを提案してきたことがあって、すぐに会員になれると大喜びする私を見た母が「高い利子でもつけようかな」と悪い笑顔でつぶやいた。その瞬間カード社会の落とし穴について習った家庭科の授業を思い出した。欲しい物がどんどん手に入る夢のような仕組みは無いし、借金は習慣化しやすいと教科書に書いてあったではないか。見返りも無くお金を借りられる制度などありはしないのだ。

他にも手元にあるお金を増やすにはどうすればよだろうと考え銀行の利息を調べては落胆したり、これまで読み飛ばしていた新聞の首都圏経済や消費者行動についての記事を面白く読んだりと身の回りで起こっていることについて、自分も社会の一員として知っておきたいと段々思うようになってきたのだ。

確かに、お金のことを人前で話すのは恥ずかしいという考えもあるだろう。けれども好きな曲をカセットテープに録音していたという親の時代とサブスクで世界中の曲に簡単にアクセス出来る現在が同じ価値観でいるなんて逆に不自然なことではないだろうか。経済的に自立することは、これから男女問わず大切である。そして私はその為に必要な知識はきちんと吸収したいと思っている。だから私がお金のことをあれこれ質問したり、興味を持って調べたりするのは決して私がケチだからではなく、経済的視野から世の中を眺め、将来について大真面目に考えているのだと信じて欲しい。そして今まで通り安心して見守っていてくれれば幸いである。